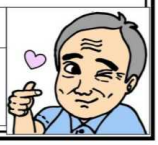
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：読書 読み取り

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



少年の日の思い出

ヘルマン＝ヘッセ
高橋 健二 訳

客は夕方の散歩から帰って、私の書斎で私のそばに腰かけていた。昼間の明るさは消えうせようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。ちょうど、私の末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、私たちは子どもや幼い日の思い出について話し合った。

「子どもができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとがまたよみがえってきたよ。それどころか、一年前から、僕はまた、チョウチョ集めをやっているよ。お目にかけようか。」と私は言った。

彼が見せてほしいと言ったので、私は収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、私はランプを取ってマッチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いっぱいに不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。

私のチョウチョは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。私たちはその上に体をかがめて、美しい形や濃いみごとな色を眺め、チョウの名前を言った。

「これはワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。ここらではごく珍しいやつだ。」と私は言った。

友人は一つのチョウを、ピンの付いたまま、箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

「妙なものだ。チョウチョを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない。僕は小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。

そしてチョウチョをまたもとの場所に刺し、箱の蓋を閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その直後、私が箱をしまって戻ってくると、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「君の収集をよく見なかったけれど。僕も子どもの時、むろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出を汚してしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

僕は、八つか九つの時、チョウチョ集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただはやりだったので、やっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度めの夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため他のことはすっかりすっぽかしてしまったので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければなるまい、と考えたほどだった。チョウを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。休暇になると、パンを一きれ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

今でも美しいチョウチョを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、僕はしばしの間、子どもだけが感じることのできる、あのなんともいえぬ、貪るような、うっとりした感じに襲われる。少年の頃、初めてキアゲハに忍び寄った、あの時味わった気持ちだ。また、そういう場合、僕はすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。強くにおう乾いた荒野の焼きつくような昼下がり、庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕はまるで宝を探す人のように、網を持って待ち伏せていたものだ。そして美しいチョウを見つけると、特別に珍しいのでなくったってかまわない、日なたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、捕らえる喜びに息もつまりそうになり、しだいに忍び寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透きとおった羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたら、なかった。そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。

僕の両親は立派な道具なんかくれなかったから、僕は自分の収集を、古い潰れたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。びんの栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼り付け、ピンをそれに留めた。こうした箱の潰れた壁の間に、僕は自分の宝物をしまっていた。初めのうち、僕は自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、他の者はガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼った飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしょにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。

ある時、僕は、僕らのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子どもにだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非のうちどころがないという悪徳をもっていた。それは子どもとしては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十、二十五ぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。しかしそれから、彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。僕はその欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それで僕は二度と彼に獲物を見せなかった。

二年たって、僕たちは、もう大きな少年になっていたが、僕の熱情はまだ絶頂にあった。その頃、あのエーミールがヤママユガをサナギからかえしたという噂が広まった。今日、僕の知人の一人が、百万マルクを受け継いだとか、歴史家リヴィウスのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、その時ほど僕は興奮しないだろう。僕たちの仲間で、ヤママユガを捕らえた者はまだなかった。僕は自分の持っていた古いチョウの本の挿絵で見たことがあるだけだった。名前を知っていながら自分の箱にまだないチョウの中で、ヤママユガほど僕が熱烈に欲しがっていたものはなかった。幾度となく僕は本の中のあの挿絵を眺めた。一人の友達は僕にこう語った。「とび色のこのチョウが、木の幹や岩に止まっている

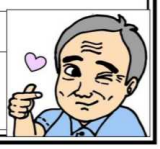
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：読書 読み取り 続き

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



ところを、鳥や他の敵が攻撃しようとすると、チョウは畳んでいる黒みがかった前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。

エーミールがこの不思議なチョウを持っているということを聞くと、僕はすっかり興奮してしまって、それが見られる時の来るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐ僕は中庭を越えて、隣の家の四階に上っていった。そこに例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが僕にはどのくらい羨ましかったかわからない。途中で僕は、誰にも会わなかった。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手に取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれに張り伸ばされて、ヤママユガは展翅板に留められていた。僕はその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたい誘惑に負けて、針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたいという逆らいがたい欲望を感じて、僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕はピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形は崩れなかった。僕はそれをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。その時、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、僕は階段を下りた。その時だ。下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このチョウを持っていることはできない、持っていてはならない、もとに返して、できるならなにごともなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということを極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後にはまたエーミールの部屋の中に立っていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。ヤママユガは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを、僕は見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかりもとどおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰かけていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとってつらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っている物のうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、他の友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼が僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もって、はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがヤママユガをだいなしにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいはネコがやったのかわからない、と語った。僕はそのチョウを見せてくれと頼んだ。二人は上に上がっていった。彼はろうそくをつけた。僕はだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた。

すると、エーミールは激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く、ちえっと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に、僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」と言った。

その瞬間、僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまい、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに、侮るように、僕の前に立っていた。彼は罵りさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

その時初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根ほり葉ほりきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、床にお入り、と言われた。僕にとってはもう遅い時刻だった。だが、その前に僕は、そっと食堂に行って、大きなとび色の厚紙の箱を取ってき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった。

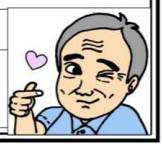
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：ワークシート１

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿番

氏名



◎この文章（小説）の作者名

ヘルマン・ヘッセ

◎この文章の構成（場面構成）ー大きく分けて二つの場面で構成されている。

前半▼（A 現在 ）の場面　書き出し～「次のように語った。」

・この場面の主人公（ 私 ）

後半▼（B 客の回想）の場面「僕は、八つか…」～おわり

・この場面の主人公（ 僕 ）＝（客）

★A 現在 の場面（前半部）

◎情景を読み取る①

ａ 季節　夏（晩春でもよいかも）－カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。

ｂ 場所　湖畔沿いの私の家（別荘）　夏至に近いころ

ｃ 時間　夕方「ちょうど私の末の男の子が、おやすみを言ったところ」

◇ここまでのところで、「あれ？」「どういうこと？」と思った点

【例】末の男の子寝るの早くね　前半部はなぜあるの　など

季節が夏で緯度の高いドイツでは日が沈むのが遅い

◎情景を読み取る②（情景把握）

「窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。」とは、どんな情景か（頭に浮かべてみる）

わずかに残る空の明るさを映す湖が暗くなってきたため色彩を失い、光を反射しない岸が黒く縁取って見える様子

「私はランプを取ってマッチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いっぱいに不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。」とは、どんな状況なのか。（頭に浮かべてみる）

ランプをつけたことによって、部屋の中が明るくなり、今まで見えていた外の景色が見えなくなる様子

「彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。」

たばこに火をつけ というところからランプは卓上にあると思われる。そこにかさをかぶせたということは、部屋の上部が暗くなった様子

◇なぜ、客はかさをランプにのせたのだろうか。（心情把握）

これから話す思い出が、つらく快くはない話のため、表情をかき消し、話やすくするため

ーメモー

国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：ワークシート２

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名

★客の回想 の場面（後半部）

◎「僕」のチョウチョ集めに対する熱情ぶりを表している表現

全くこの遊戯のとりこ

この遊戯＝チョウ集め　とりこ（虜）＝とらわれの身

他のことはすっかりすっぽかしてしまった

みんなは何度も、ぼくにそれをやめさせなければなるまい、と考えたほど

学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。

パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩く

◎「幼い日の無数の瞬間」とは

・強くにおう、乾いた荒野の、焼けつくような昼下がり

・庭の中の涼しい朝

・神秘的な森の外れの夕方

走馬灯（そうまとう）のように、めくるめく順不同の思い出

◎「僕」の環境

・「自分の宝物」とは

自分のチョウの収集

・「自分の幼稚な設備」とは

つぶれたボール紙の箱

劣等感をやどしている

◎隣の子供について

▽名前（後で出てくる）

エーミール

▽素性（隣の子供の情報）

・中庭の向こうに住んでいる先生の息子

・非の打ちどころがないという悪徳をもっている

それは僕からすれば、「子供としては二倍も気味悪い性質」だった。

・非常に難しい、珍しい技術を心得ている

あらゆる点で（　模範（もはん）　）少年

そのため（僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。　）

▽僕から見たエーミールを表す別の表現

・専門家

・こっぴどい批評家

◎ヤママユガをさなぎからかえしたという噂（うわさ）を聞いたときの僕

（　そのときほど、僕は興奮しないだろう。　）

つまりとても（　驚いた　）

◇その驚きの度合いを表現した部分

今日、僕の知人の一人が百万マルクを受け継いだとか、歴史家リヴィウスのなくなった本が発見されたとか

以上に 興奮した。

ヤママユガは、僕が（　熱烈にほしがっていた　）チョウ

国語学習プリント　　date：　　年　月　日

学習内容：ワークシート3

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名

★客の回想 の場面（後半部）２　・・・続き

◇心情の変化を読み取ろう

◎「四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。」

①ａこの表現にみられる技法（表現技法）

擬人法（人でないものを人であるかのようにたとえる修辞法）

ｂこの表現からわかる「僕」の心情

目をそらすことができないほどの魅力を感じている

②このあと（見たあと）の僕の感情や取った行動

この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。

◎ちょうをエーミールの部屋から持ち出したときの僕の感情

大きな満足感 のほか何も感じていなかった。

◎階段を下り、下から上がってくる音が聞こえたときからの心情

・僕の良心は目覚めた。

←・自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟る

←・見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われる

←・大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。

※下劣＝品性の卑しさが目立つ様子　大それた＝とんでもない

▼お手伝いさんとすれ違ってから

胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら

◎「なにごともなかったようにしておかねばならない」とエーミールの部屋に引き返してから

ａ「どんな不幸」とは

ヤママユガがつぶれてしまったこと

ｂその時の僕の気持ち〈微妙な僕の気持ちがをえがいた部分を書きぬく〉

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。

◎母に一切を打ち明けたあと、僕がエーミールのところへ行くのをためらった理由〈一文で抜き出してみよう〉

彼が僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もって、はっきり感じていた。

から

◎それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた。

▽何をわかってほしくて、詳しく話し、説明しようとしたのか

潰すつもりはなかったこと　すぐに返そうとしたこと

君（エーミール）を困らせようと思ってやったのではないこと

嫌がらせ

▽エーミールの反応　教出（P253 L2~L5 L6~L12）の二段落

激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低くちぇっと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていた。

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」

彼は冷淡にかまえ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていた

「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」

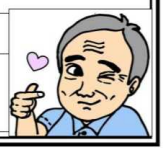
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：ワークシート４

少年の日の思い出

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



◎すんでのところで　とはどういう意味

もう少しのところで

◎僕から見たエーミール

（僕からはエーミールがどのように見えていたのか）

エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。

語句（　あなどる　）＝相手をばかにして軽く見る

◎僕が悟ったこと

一度起きたことは、もう償いのできないものだということ

◎「母が根ほり葉ほりきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。」

▽ここからわかる僕にとっての母の存在とは

唯一の理解者〔僕を理解してくれる唯一の存在〕

◎「チョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった。」のはなぜか。

・取り返しがつかないことをしたという罪悪感から自分を罰するため

・エーミールへの怒りを感じつつも言い返せない悔しさ

・ちょうへの思いを断ち切るため

【応用編】

☆図・挿絵（ヘッセの書き物机の収集）からわかること

〈片羽根のとれたヤママユガ〉

「少年の日の思い出」に照らすと、ちょうの収集が残っているとすれば、エーミールのところ

つまり、エーミール＝作者 なのでないか

ヘッセは宣教師（先生）の息子

◇構成のなぞ（現在→回想 で終わる）

現在の場面の必要性

自分の中にあるそれぞれ〔私、客（僕）、エーミール〕の立場を表現するため現在・青年時代・少年時代

◇筆者を表す（投影する）登場人物はだれなのか

母を除く登場人物〔私、客（僕）、エーミール〕

とすれば ←

母を除く登場人物〔私、客（僕）、エーミール〕は、作者を投影したものではないか。

◎この話の主題は何なのか（筆者は何を述べたかったのか）

・物事を杓子定規に理不尽に決めつけてかかる世の中への反発

・弁解・弁明の余地もゆるされぬ世の中

・理解しようとする心を持たない社会

・自分が最も嫌う行為（理解しようともせずに頭ごなしに決めつけること）を自分で自分がしていたというパラドックス　　など

ヘッセが一九一一年6月6日に、ミュンヘンの雑誌《青年》に発表した「クジャクヤママユ」が初稿であるが、二十年後の一九三一年に改稿し、ドイツの地方新聞8月1日号に掲載されたのが「少年の日の思い出」である。

なぜ、一度発表されたものを新聞掲載したかは定かではないが、ナチス台頭のころであり、後に書くことを奪われるヘッセにとっては、迫り来る世の情勢に、何らかの理不尽さを伴う圧力を感じたため、大人も目にする新聞に掲載したのではないかと想像できる。この「少年の日の思い出」は訳者高橋健二氏が直接ヘッセから新聞の切り抜きをもらい日本に持ち帰って発表されたものである。